慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	がん薬物療法を受ける高齢者のフレイル予防 : 縦断研究によるハーモニーケアモデル開発
Sub Title	Preventing frailty in older adults undergoing cancer chemotherapy : development of a harmonized care model, a longitudinal study
Author	矢ヶ崎, 香(Yagasaki, Kaori) 浜本, 康夫(Hamamoto, Yasuo) 小松, 浩子(Komatsu, Hiroko) 新幡, 智子(Arahata, Tomoko)
Publisher	
Publication year	2024
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2023.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究は、がん薬物療法を受ける高齢がん患者のフレイルの影響要因の解明とフレイル予防のためのモデル開発を目的とした。特に高齢がん患者のフレイル予防の観点から、がん薬物療法を受ける高齢者の食生活に焦点化した質的研究およびQOLとフレイル、食欲の関連について縦断研究を実施した。高齢がん患者のQOLの影響要因として症状、食欲、不安が示された。ケアモデルとして症状緩和、がんの進行や症状等の不安の相談、食を通しての楽しみや喜びに着眼した個別的な支援が抽出された。がんをもつ高齢者にとって食は生きる源、喜びや価値を意味しており、治療に伴う食の影響を最小限するための工夫の重要性が示唆された。 This study aimed to elucidate the factors affecting frailty in older patients with cancer undergoing chemotherapy and to develop a preventive care model. Specifically, through qualitative research on dietary habits and a longitudinal study on the relationship between quality of life (QOL), frailty, and appetite, the study examined ways to prevent frailty in this demographic. The findings revealed that symptoms, appetite, and anxiety significantly impact the QOL of older patients with cancer. The proposed care model includes symptom palliation, counseling for anxiety about cancer progression and symptoms, and individualized support emphasizing enjoyment and pleasure through food. For older adults with cancer, food is a source of life, joy, and value. This study highlights the importance of devising strategies to minimize the negative impact of dietary changes during treatment.
Notes	研究種目 : 基盤研究 (B) (一般) 研究期間 : 2019 ~ 2022 課題番号 : 19H03938 研究分野 : がん看護、緩和ケア、慢性期看護
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_19H03938seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｈ０３９３８

研究課題名（和文）がん薬物療法を受ける高齢者のフレイル予防：縦断研究によるハ-モニ-ケアモデル開発

研究課題名（英文）Preventing Frailty in Older Adults Undergoing Cancer Chemotherapy: Development of a Harmonized Care Model, a Longitudinal Study

研究代表者

矢ヶ崎　香（Yagasaki, Kaori）

慶應義塾大学・看護医療学部（信濃町）・教授

研究者番号：８０４５９２４７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,950,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、がん薬物療法を受ける高齢がん患者のフレイルの影響要因の解明とフレイル予防のためのモデル開発を目的とした。特に高齢がん患者のフレイル予防の観点から、がん薬物療法を受ける高齢者の食生活に焦点化した質的研究およびQOLとフレイル、食欲の関連について縦断研究を実施した。
高齢がん患者のQOLの影響要因として症状、食欲、不安が示された。ケアモデルとして症状緩和、がんの進行や症状等の不安の相談、食を通しての楽しみや喜びに着眼した個別的な支援が抽出された。がんをもつ高齢者にとって食は生きる源、喜びや価値を意味しており、治療に伴う食の影響を最小限するための工夫の重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
がん薬物療法を受ける高齢者がフレイルを予防し、自立した生活を保つことはQOL維持、向上に貢献する。本研究が明らかにしたがん薬物療法を受ける高齢がん患者の症状緩和、病状の進行や症状による不安の緩和および食の楽しみや価値を尊重した支援は、高齢者のがん医療の質向上に貢献するといえる。食事摂取量や栄養という視点だけでなく、食の価値、喜びを再獲得できるための医療者の支援の姿勢を示したことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to elucidate the factors affecting frailty in older patients with cancer undergoing chemotherapy and to develop a preventive care model. Specifically, through qualitative research on dietary habits and a longitudinal study on the relationship between quality of life (QOL), frailty, and appetite, the study examined ways to prevent frailty in this demographic. The findings revealed that symptoms, appetite, and anxiety significantly impact the QOL of older patients with cancer. The proposed care model includes symptom palliation, counseling for anxiety about cancer progression and symptoms, and individualized support emphasizing enjoyment and pleasure through food. For older adults with cancer, food is a source of life, joy, and value. This study highlights the importance of devising strategies to minimize the negative impact of dietary changes during treatment.

研究分野：がん看護、緩和ケア、慢性期看護

キーワード：がん薬物療法　高齢者　フレイル　食生活　QOL　コーピング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

超高齢化社会おいて高齢がん患者の健康問題と医療のあり方は世界的な課題である。国際的にもがん患者の 3 分の 2 が 65 歳以上の高齢者となり[1,2]、2030 年にはがん患者の半数以上が 75 歳以上の後期高齢者になると推測されている[3]。人生の高齢期にがんを発症し、がん治療を受けながら家で暮らす高齢者が大半を占めることになる。高齢者のがん医療のあり方は重点課題である。これまでがん医療はがん患者の生命を守り、そして Quality of life（以下、QOL）を高めるために標準治療や有害事象の支持療法の開発と実践に主眼を置き、がん患者が治療と生活を両立することを可能にしてきた。

しかし、高齢者にとってがん薬物療法は有害事象の重篤化のリスクが高く、フレイルのリスク要因となる可能性がある[4]。高齢者のフレイルの割合はがん患者の方ががんに罹患していない者（65 歳以上）よりも高いという指摘もある[4,5]。がん薬物療法が負荷となってフレイルに至る可能性があるといえる。しかしながら、高齢者の認知機能、身体機能の状態は個別差が大きく、がん医療においては医療者が手探りで診療や看護を行っている現状がある。がん薬物療法を受ける高齢がん患者の QOL の維持、向上には、有害事象の悪化やフレイルの進行を予防するためのケアが重要な鍵となる。

がん薬物療法を受ける高齢者に対するフレイルの進行予防のケアが不可欠であり、本研究で QOL の影響要因を明らかにし、ケアモデルの開発と実用化を検討することが必要であると考えた。高齢がん患者に対し、過剰もしくは過少な安全性の確保や介入にならないように、個々の意向や価値観を尊重し、潜在的な力を引き出し、精神的安寧や活力を高めるようなケアモデルが、高齢がん患者の自立を支え、QOL の維持、向上につながる可能性があるといえる。

２．研究の目的

Ⅰ. がん薬物療法を受ける進行高齢がん患者の治療と生活やフレイルの状態、ニーズを質的研究により、および QOL とフレイルの影響要因を縦断観察研究により明らかにすること、Ⅱ.がん薬物療法を受ける高齢がん患者のフレイルの進行予防のためのハーモニーケアモデルの開発と実用性を検討する。

Ⅰ-A がん治療を受けている高齢がん患者の食事、栄養に関するニーズ：質的研究

本研究では、がん治療を受けているフレイルな高齢がん患者が日常生活の中で食事や栄養に関してどのような困難や課題があるのか、またどのようなニーズがあるのかを当事者の体験から明らかにすることを目的とした。

Ⅰ-B がん薬物療法を受ける高齢がん患者の QOL とフレイル、食欲、症状群に関する縦断観察研究

本研究は、がん薬物療法を受けている進行消化器がん高齢者の症状クラスター、コーピングを特定し、QOL に影響を与える因子を抽出することを目的に、3 カ月間の前向き縦断研究を実施した。

Ⅱ. Ⅰ－A と B の結果と文献検討に基づき、ケアモデルの考案を行い、実用性の検討を目的とした。

３．研究の方法

当初の予定であった Mixed Methods ではなく、高齢がん患者の体験理解を最優先に探究することとし、質的研究と量的研究をそれぞれ実施した。

Ⅰ－A　がん治療を受けている高齢がん患者の食事、栄養に関するニーズ：質的研究

研究デザイン：質的研究(テーマ分析)

対象者：消化器がんを診断され、がん治療を受けている/受けた 70 歳以上の高齢者で外来に通院中の者とした。

データ収集：面接は研究参加者が自由に語れ、プライバシーが厳守できる環境で半構造化面接を約 30－40 分実施した。

インタビューは、「がん治療後、食生活、食欲、体重、体力などに変化はありましたか？」「外食の頻度や人間関係に変化はありましたか？食事の楽しみは何ですか？」などを尋ねた。

分析方法：研究者がインタビューで録音したデータを逐語録に起こし、Thematic analysis を用いて分析した。具体的には、1)逐語録に起こしたデータを繰り返し読む。2) データを一行一行じっくりと読みながら、データを意味毎に分けて内容を表す表示（ラベル）を付す。3)類似した表示を統合し、概念的なまとまりを作り、テーマをつける。4)テーマを見直す。5)それぞれのテーマの定義を明確にする　6)分析の最終段階では、各テーマとデータに飛躍がないか、研究メンバーは見直し、分析結果をまとめた。

Ⅰ－B　がん薬物療法を受ける高齢がん患者の QOL とフレイル、食欲、症状群に関する縦断観

察研究
研究デザイン：2021 年度までの質的研究の成果に基づき、がん薬物療法を受ける進行消化器がんの高齢者を対象にがん治療に伴う QOL と症状クラスター、コーピング、フレイル、食の影響要因を明らかにするために縦断観察研究（3 カ月、3 時点）を実施し、モデルの開発を目指した。本研究の対象者は、消化器がんの 70 歳以上の高齢者とし、新たなレジメン（治療計画）の治療開始後３カ月未満の者とした。調査項目は、症状、食欲（SNAQ)、コーピング、QOL、フレイル（G8)、心理面（K6）を質問紙で調査した。
分析方法：症状クラスターはクラスター分析、影響要因は重回帰分析を用いた。

４．研究成果

Ⅰ－A. がん治療を受けている高齢がん患者の食事、栄養に関するニーズ：質的研究

消化器がん治療中の 70 歳以上の高齢患者を対象にがんや治療が食生活に与える影響をどのように認識しているかを探るために質的研究を行った。
研究参加者は、70 歳以上の消化器がんと診断された外来患者 21 名、平均年齢は 75.1 歳であった。テーマ分析の結果、３つのテーマが導かれた（表１）。
テーマ１：日常生活への影響
高齢がん患者の経験として、味覚の変化による食事の問題、社会的交流の減少が挙げられた。

テーマ 2：食の重要性
複数の参加者が「生きていくために、食事は不可欠」「生きる源」と認識していた。食生活の原点に立ち返ると、参加者の食行動はさまざまであり、食生活のルーツや食行動の背景にある個人的な意味という視点から、何のために何を食べるべきか、など個々の価値や考えによるところが明らかになった。

テーマ 3　食べる喜びを再発見
がん体験が高齢者に建設的な変化ももたらしたことが明らかになった。あらゆる困難にもかかわらず、参加者は五感を使って食事を楽しみ、独自のレシピまで考案し、食を楽しむことを取り戻していた。また、家族と共に食の問題に対処することは精神的にも大きな支えとなった。

消化器がんの高齢者は、がんや治療に伴い、食事の変化を経験し、精神社会的にも影響を受けていた。様々な困難に直面しながらも、高齢者にとって食は、栄養や体力の維持のためだけでなく、食べる喜びも求めていた。個人の食べる価値観に基づいたセルフケアは、消化器がん高齢者が変化した食生活の中に食べる喜びを見出すことに役立つことが示唆された。すなわち食の問題に対して、「栄養補給」という視点だけでは患者の真のニーズを満たさないことを示している。個々の食の意味と価値は十分に理解されるべきである。医療者は、試行錯誤しながらおいしいものを食べる喜びを取り戻そうとしている高齢がん患者の姿勢や価値を理解し、新たな支援のあり方を考えることが不可欠である。

表1

テーマ	サブテーマ
Impact on daily life Eating	Eating problems due to taste alterations Decreased social interactions
Significance of Eating	Eat to live My role of building strength against cancer Back to the roots of my dietary habits
Rediscovering the Joy of Eating	Mindful eating Creative cooking Family ties

本研究成果は、Rediscovering the Joy of Eating in Older Adults With Gastrointestinal Cancer Undergoing Treatment: A Qualitative Study. Cancer Care Research Online. 2(1):e017, January 2022.に公開した。

Ⅰ－B がん薬物療法を受ける高齢がん患者の QOL とフレイル、食欲、症状群に関する縦断観察研究

本研究は進行消化器がん高齢者79名を研究参加者とし、フォローアップ調査終了者のうち74名の解析結果を示す。症状クラスターは、Two Step クラスター分析を実施し、結果としてBIC基準による最適クラスター分類数は、「2」組で、症状の「重度群」25名と「やや軽度群」47名の2

群に分類された。欠損2名は未分類となった。分類された参加者の内訳は、男性 38名、女性 34名、平均年齢 76.69歳であった。脱落者は10名（症状の進行等）であった。2組のクラスター分類に際する適合度は、Moderateな分類であると評価された。

ベースライン（T0）では、2群間のK6とG8に差を認めた。T2のQOLと各変数の相関は、味覚、不安、K6、食欲（SNAQ)、症状の平均、生活支障の平均がすべての時点で相関を認めた。コーピングスタイルは時点によって相関のある変数が異なったが、情緒的サポートの利用はT1,T2にてQOLと相関を認めた。

重回帰分析でQOLへの影響要因として「不安」「症状による生活の支障」に関連を認めた。別のモデルでは不安（K6)、食欲（SNAQ）に関連を認めた。本研究において、未だ明らかになっていない進行消化器がんの高齢者の症状クラスターとコーピングを特定し、QOL の影響要因を明らかにし、モデルを開発することすることで、QOLの維持、向上やフレイル予防を目指した高齢者のコーピングを活かしたセルフケア支援の開発につながるといえる。

本研究成果は論文作成後、国際誌へ投稿予定である。

Ⅱ．がん薬物療法を受ける高齢がん患者に対するケアモデルの開発と検討

これまでの質的研究と縦断研究の結果および医師や看護師からの意見、文献レビューの結果を基盤に、がん薬物療法を受ける高齢がん患者が実用できるケアモデルの開発を行い、実用性を検討した。

質的研究の結果として、がん薬物療法を受ける高齢がん患者にとってフレイルを予防し、QOL を維持、向上するための根源は食生活にあると着眼できた。特に食生活は、栄養という点だけでなく、命の源であり、エネルギーとなる生きる上で不可欠なものと、高齢者は認識していた。この基盤に加えて、食の楽しみ、価値、人生そのものに関わる精神、社会的要素が強いことも本研究から明らかになった。加えて、量的研究の解析結果にて、QOL への影響要因は症状による日常生活の支障、食欲、および不安等の精神的症状であることが明らかになった。がんの進行やがんそのもの、がん薬物療法による多様な症状は不安の増強、食欲低下をもたらし、QOL を低下させることが明らかとなった。

進行消化器がん高齢者に対するケアモデルとしては、１）早期からの多様な症状の緩和マネジメント、２）病状の進行、予後への不安や症状に伴う不安やストレスを和らげるための多職種による精神的支援、３）栄養だけでなく、食生活の新たな視点の提供（自分の価値に沿った楽しみ）と価値を尊重した支援で構成された。特に医療者や患者、家族が栄養だけに着眼するのではなく、少しでもおいしく、楽しく食生活が維持できるための症状緩和と視点の提供が必要である。実用性に関しては、多職種が専門的介入の基盤として、高齢者が人生を通して培ってきた価値や意向の尊重が不可欠であり、その姿勢や考えを理解することから始まる。

本研究の成果として、進行がんの高齢者が様々な症状や苦痛を抱える中で、個々の価値、意向を尊重した医療者の支援の着眼点や姿勢を示唆することができたといえる。

Reference

1. Mohile SG, et al. Practical Assessment and Management of Vulnerabilities in Older Patients Receiving Chemotherapy:ASCO Guideline for Geriatric Oncology Summary. J Oncol Pract. 2018. 14(7):442-446.
2. Parry C,et al. Cancer Survivors: A Booming Population. Cancer Epidemiol Biomarkers Prev. 2011. 20(10):1996-2005.
3. 雑賀公美子, 他. 日本のがん罹患の将来推計. がん統計白書2012.篠原出版新社. 東京. 2012. 63-81.
4. Handforth C, et al. The prevalence and outcomes of frailty in older cancer patients: a systematic review. Ann Oncol. 2015.26(6):1091-1101.
5. Mohile SG, etal. Improving the quality of survivorship for older adults with cancer. Cancer. 2016.122(16):2459-568.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Kaori Yagasaki, Hiroko Komatsu, Yasuo Hamamoto	４．巻 2
２．論文標題 Rediscovering the Joy of Eating in Older Adults With Gastrointestinal Cancer Undergoing Treatment：a Qualitative Study	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Cancer Care Research Online	６．最初と最後の頁 e017
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1097/CR9.0000000000000017	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

がん薬物療法を受ける高齢者のフレイル予防 https://keio-cancernurse.jp/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	浜本　康夫 (Hamamoto Yasuo) (10513921)	慶應義塾大学・医学部（信濃町）・准教授 (32612)	
研究分担者	小松　浩子 (Komatsu Hiroko) (60158300)	日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・教授 (37123)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
連携研究者	新幡　智子 (Arahata Tomoko) (60458958)	慶應義塾大学・看護医療学部・専任講師 (32612)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関